

第 1 回「北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョン」有識者懇話会 議事録

- 1 日 時：令和 7 年（2025 年）10 月 6 日（月）15:00～16:30
- 2 場 所：TKP 札幌ビジネスセンター赤れんが前 ホール 5 H
- 3 出席者：「出席者名簿」のとおり
- 4 議 題：
 - (1) 有識者懇話会の開催について
 - (2) 意見交換

5 議 事：

(1) 開 会

○事務局（真鍋参事）

第 1 回「北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョン」有識者懇話会を開催する。開催に当たり、北海道経済部次世代社会戦略監の大矢からご挨拶を申し上げます。

○大矢次世代社会戦略監

本日は、お忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。

北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョンの有識者懇話会ということで、ビジョン策定の際にもお集まりいただいたところ。ビジョンの計画期間を 10 年間、重点期間を 5 年間としているが、通常、5 年目を経過した頃に懇話会を開催し、その次のローリングをする際に有識者の皆様にお集まりいただいて議論をお願いすることが多いが、今回は 2 年が経過する前に改訂したいと考え、お集まりいただいた。

新規にご参加いただいている有識者の方もいらっしゃるが、今回の改訂の趣旨としては、皆様もご承知のように、この世界は動きが非常に早く、昔の行政計画の 10 年もの、5 年ものでは追いつけない状況になっていること。また、本年 5 月に成立した国の AI 法には都道府県による AI の活用が記載され、道としても対応を要する状況の中、AI の計算基盤につながるものがデータセンターや半導体であるが、北海道では既に 45 のデータセンターが立地表明をされており、我々としても計算基盤としてこれから活用していこうという意気込みがあることから、現行の北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョンに AI 政策を盛り込む形でビジョンを改訂したいということで、今回、改めて皆様にお集まりいただいた。

今回は年度末に向けての改訂作業になるが、今年度もあと半年しかない中で、皆様方には短期間で濃密な議論をお願いしたいと思っているが、その点、ご了承いただけるよ

うお願いする。

もう一つ、この1年半の中で、道議会の議論で言われているのは、半導体に係る千歳周辺の立地の効果を全道に波及するにはどうしたらいいだろうという話。この点については、現行のビジョンの中でも掲げているが、それらをAI政策と絡めて、AIによって地域課題を解決していく、地域の人手不足を解決していく、地域の産業を高度化していく、高付加価値化していくといった道筋をもってすれば、全道への波及も想定されるのではないかと考えており、その点についても皆様からご意見をいただき、ラピダス社の立地を契機に、そのチャンスを全道に波及していくことをビジョンに表したい考え。様々なお専門の方にお集まりいただき、皆様の言葉を一言一句漏らさずにお伺いし、今回の有識者懇話会には非常に期待をしているので、よろしくお願ひしたい。

(2) 有識者懇話会の開催について

○事務局（眞鍋参事）

それでは、次第2「有識者懇話会の開催」について事務局から説明する。

（事務局から資料1について説明）

また、開催要領第4条に基づき、座長については、指名によることとし、釧路公立大学の中村教授に座長をお願いする。中村教授から、一言ご挨拶を頂戴したく、よろしくお願ひする。

○中村座長

今回、座長を指名いただいたので、よろしくお願ひする。

本来、そちらにお伺いして座長を務めるところ、今回は難しかったが、次回以降、なるべく会場で参加して、リアルで皆様と意見交換させていただきたいと考えている。オンラインでの座長となるが、皆様との意見交換に滞りが出ないように努めるので、ご協力をお願いする。

最初に大矢次世代社会戦略監から説明があったが、策定したばかりのビジョンではあるが、大きな環境変化が起こっている。ラピダス社の次世代半導体プロジェクトは順調に進み、さらにデータセンターや半導体関連産業の集積も進んできたという北海道の中の事情と、もう一つは、国によりAIや半導体産業に対する支援策が強化されていること。このように環境変化の動きが早いため、それを踏まえた形でビジョンを改訂したいというのが今回の狙いであると、道から説明を受けている。この点については、事務局から説明があると思うが、ビジョンの改訂に当たり、皆様からご意見を頂戴できればと思っているので、よろしくお願ひする。

○事務局（眞鍋参事）

それでは、中村座長に進行をお願いする。

○中村座長

まず、事務局から、「北海道半導体・デジタル関連産業振興ビジョン」の改訂について説明願う。

○事務局（江刺主幹）

それでは、現行ビジョンの概要及び改訂の方向性について事務局から説明する。
（資料2について説明）

○中村座長

まず、ビジョン改訂のスケジュール、現行ビジョンの内容、そして、資料2の4ページの「ビジョン改訂の方向性」では、フェーズの変化を踏まえ、AIの支援策強化に対応するような形にすること、道のGX特区や推進税制など支援制度も盛り込んだ形にすること、ラピダス社で着々と取り組まれている状況を踏まえた形にすること、加えて、アジアのデータハブに向けた動きが出てきている中で、今回、資料の青色の枠の部分、これからの情勢を整理し、道の取組を記載していくということで、特に、AI政策を盛り込む形で改訂したい旨の説明があった。

前回、ビジョン策定時の懇話会にご参加いただいた方は、前回の議論内容をご存じかと思うので、短い説明で理解できるかもしれないが、今回初めてご参加の方は、何が求められているのか、分かりにくいところもあると思う。したがって、まず最初に、現行ビジョンそのものと、このように改訂したいということについて、皆様で共通理解をした上で議論していきたいので、素朴な疑問も含めて、質問等がある方はお知らせいただければと思うが、いかがか。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

本道におけるAI政策の基本的考え方について、資料2の5ページに示されているエコシステムの構築そのものが、北海道におけるAI政策の基本と捉えれば良いか。

○事務局（大矢次世代社会戦略監）

小高理事長のご指摘のとおり、道のAI政策の基本的考え方は、資料2の5ページの内容。

右側の青色で記載したAIの活用そのものは国や専門機関等が行うが、それを社会に実装していくためのフィールドとして北海道を使う。他県にはない広大な農地や第1次産業、降雪という特殊な環境、自動運転の環境。要は、人口密度が低い実証フィールドが良い場合もあると考えている。一方で、まさに人口減少が他県よりも早く進んでいるという意味で、課題の先進地という言い方をするが、AIの活用によって省人化や省力

化といったものを実証していく適地として北海道があるのではないかと考えている。こうした認識の下、実際に実証していく中で、関連する企業にも来てもらい、資料の中で「スタートアップ等の集積」と記載したところで、新たな産業集積を図っていくという考え。

北海道には、他県にはないような半導体の製造拠点が既にあり、再エネの供給拠点の近傍にデータセンター等の再エネ利活用施設をつくるという国の方策がGX2040ビジョンの中で謳われているが、それらも北海道では既に整っていることから、他県に先行して利活用を進めていこうというのが本道におけるAI政策の基本的な考え方であり、絵にすると、5ページの内容とご理解いただきたい。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

本道の多様な実証フィールドを徹底活用したAIの研究開発とは、データを北海道でとることも想定されているか。

○事務局（大矢次世代社会戦略監）

研究開発と記載しているのは、そうした意図もある。単純に実証フィールドとして使用され帰られてしまうより、北海道の中でデータを蓄積していくことも意識し、研究開発の推進という言い方をしたところ。

○北海道大学大学院 太田教授

ビジョンは大きな方向性を示すものか、あるいは、それを実現するための政策手段まで踏み込んで議論したものを示すものか。

○事務局（浦田室長）

現行ビジョンの第4章、42から44ページにおいて、例えば、複合拠点の実現に向けての方針として、具体的な取組を記載している。その中で、当初5年間で重点的に実施するものを黒丸で示しており、現行ビジョンでは、大きな方向性に加え、施策として取り組んでいきたいものまでお示しているところ。

○北海道大学大学院 太田教授

取り組む項目は理解するが、取り組み方について、補助金や規制緩和、公共インフラの建設など色々なやり方があると思うが、そこまではビジョン策定の中には含まないという理解で良いか。

○事務局（浦田室長）

具体的な財源や手法は、道の施策の場合、政策立案を進めていく際に細かく突き詰め

ていくが、ビジョンではそこまでは記載しない。

○北海道大学大学院 石井教授

資料2の5ページについて、本道におけるAI政策の基本的な考え方は承知したが、年度内を目途に取りまとめることとされている道としてのAI政策の推進方策が今回改訂するビジョンということで良いか。

○事務局（大矢次世代社会戦略監）

ビジョンにAIを盛り込むことで推進方策としたい。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

本道におけるAIの利活用促進という言葉について、次世代半導体やAIを使ったサービスを提供する側の話であるのか、それを使って道内産業の高度化を図りたいというユーザー側の話であるのか、あるいは、両方であるのか。区別して論じるのはなかなか難しいと思う。

実は、地方部に行くと、北海道の1次産業で次世代半導体を使うのは不必要であるから、それを活用して産業を高度化するという文脈で道内に横展開するのは、非現実的ではないかという意見をよく伺う。この先の議論かもしれないが、どのような視野で議論していけば良いか。

○事務局（大矢次世代社会戦略監）

特に定義があるわけではなく、これからご議論いただきたいと思うが、自動運転トラクター等の技能の継承や、農業や水産業の技術を継承していくためにAIを使用して産業を維持、継続していこうということについては、もともと利活用側の議論がある。

一方で、近くにいる必要はないという議論もあるかもしれないが、利用が生まれれば、そこにAIの技術やサービスを提供する側も北海道に集積する可能性があるという意味で、サービスの提供側とユーザー側の両面での議論をイメージしている。地域の課題解決にAI技術を使う際、技術の提供者が道内や地域にお越しになるということもあると思うので、それを両睨みしていくというのが、このまとめのイメージ。どのように普及啓発すれば、地域に熱感が生まれるのかといった議論も期待している。

○株式会社調和技研 中村代表取締役社長

ビジョンの改訂では、どこまで実現性を意識しながらお話するべきか。小高理事長がおっしゃったように、地方では半導体はまだ使わないといったことも踏まえて、実現性のある話をするのが良いのか、最初にお聞きしたい。

例えば、弊社は18年間、札幌でビジネスを行っているが、顧客の9割は東京など首都

圏や名古屋。それでビジネスが成り立っている一方、もともと北海道大学のキャンパスで生まれた会社であるので、北海道の課題を解決したいと思っている。売上げの比率の9割は首都圏である一方、持ち込まれる課題は逆転して北海道が多くなっており、先ほど大矢次世代社会戦略監から話があった課題先進地域ということで、課題はものすごくある。そうした小さな案件で一生懸命対応していることを、半導体やデータセンターを活用するという大きな話に直結させることは、なかなか難しいと思いながら伺っていた。

実現性をどこまで考えるか、夢を語って10年後にこういうことをやりたいという提案で良いのか。私の実務の経験として語ってほしいということであれば、お話しできることもあると思うが、その点を共通の認識として持っていたいと思い、質問させていただく。

○事務局（浦田室長）

現行ビジョン策定時、今から1年半前の議論の際には見えていなかったことが多くあり、まずは、実現性という観点で、反映できるものは反映していきたいと考えている。特に、全道への効果の波及の道筋を解明できるようなものを盛り込んでいきたい。

ただ、夢を語ってはいけないということではなく、毎日のようにAIについて報道がなされ、非常に夢のある話もある中で、道内のフィールドに合致するようなものがあれば、盛り込めるものは盛り込む、反映できるものは反映したいと考えている。

○株式会社調和技研 中村代表取締役社長

ご指摘のとおり、状況はここ3年くらいで明らかに違ってきていると思う。10年前に持ち込まれる課題は、東京の企業から実験的にやりたいという話が多かった。おそらく、オープンイノベーションの話で、他にできる人がいないので当社に持ち込まれるという時代があった。その後、ChatGPTを誰でも活用できる時代になった。弊社は地域に育てられた会社なので、北海道の仕事をやりたいとずっと思っているが、最近、面白いと思ったのは、一昨年くらいから、札幌で対応した地域課題の解決と同じようなパターンのことが、苫小牧や旭川のような地方の都市から話が持ち込まれるようになり、今年には稚内や名寄の青年団等からも話が入ってくるようになった。

AIは特殊なところがあって、札幌では、みんなで何かやろうということになると、100人くらいは集まってくるという土壌ができていますが、道内の地域からそういう声が出てくるということは、時間はかかるかもしれないが、地方でも同じようなことができるのではないかと考えている。その前提として、共通のプラットフォームなどを通じ、こうしたことができる人材を教育していくことが最初の一步であり、AIを語れる人づくり、手を動かせる人づくりから始めていくのが、夢には終わらない一步目、一丁目一番地ではないかと思う。

○中村座長

中村社長のお話では、実際には、地域ではまだAIを使わないというところもあるが、その一方で新しい動きも出てきているところを見ると、地域課題自体はあるので、すぐにビジネスになるものはないかもしれないが、まずは人づくりから始めることが必要。地域の波及効果として、ビジネスや売上げがすぐにどうなるということではなく、地域での人づくりという切り口を強調していくのが良いのではないかと、そういったご意見で良いか。

○株式会社調和技研 中村代表取締役社長

地域に行くと、「こんなことで悩んでいる」といった話が出てきて、少し前の事例という、昆布の良し悪しを見分ける方法やサケの骨を取る方法、ホタテの裏表を見分ける方法など、面白い話が転がっている。ホタテの殻は機械で取るが、殻の裏表を見分けながら、良いあんばいでその機械にホタテを投入するのは65歳以上の人たち。そういった作業を簡単にできないかなど、地域の課題もある。ただ、経済的な波及効果がどれくらいあるのか、そこはやはりクエスチョンマークなのかなというところもある。

○北海道ニュートピアデータセンター研究会 前田運営委員

ビジョンを「拡張」することに賛成だが、範囲が広がると、「では何をするのか」ということになるので、今回の議論の中で色をつけたい。ビジョンの下の戦略が見えていないので、ビジョンができた後に何が起こるのかが分からない。絵空事を話せばいいのか、これにぶら下がる政策が見えるようにしっかり道筋をつくってほしいのかを明確にした方が夢と現実の折り合いがつけやすいのかなという感想を持っている。

○事務局（浦田室長）

ご指摘のあったような観点で整理しながら、ビジョンを改訂した後に、施策としてどのようなことに取り組んでいくべきかということについて議論をしていきたい。

○中村座長

今の答えは、どこまでビジョンに書けるかは分からないが、今後、政策を進める上で、戦略や道筋も含めて議論してほしいということで良いか。

○事務局（大矢次世代社会戦略監）

ビジョンへの記載については、何をするのか少しでもイメージできるように、表現方法を工夫などしながら整理したい。

○中村座長

議論のレベルでは、ストラテジーや道筋も含めて話をしていただければと思うので、他にも感想や意見をいただきたい。

○ミツミ電機株式会社 久米事業執行役半導体部門副部門長

この懇話会は、「北海道半導体関連産業振興ビジョン有識者懇話会」という名前で始まり、その議論の中で、デジタルが加わって現在の名称になっていると理解。今回のお話を伺い、デジタルの内数かもしれないが、AIにフォーカスしていこうということと理解した。AIについては、ミネベアミツミグループは製造業であり、製造の中にもAIを活用していこうというところであるが、正直、ユーザー側の目線で少し意見はできるかもしれないが、まだよく分かっていないところもある。

前回、ビジョンを策定した際には、半導体の人材育成、教育機関との協力を盛り込んだと思うが、今回の改訂の方向性を見ると、その辺があまり見えなかったので、学校関係も活躍できるところがあるのではないのかと感じた。

○事務局（浦田室長）

今回の主な論点はAI政策としているが、人材育成の観点ではビジョンにおける大事な柱の一つであることに変わりない。特に今年度から、北大や千歳科技大学、千歳市、札幌市、道が連携して、国の交付金を活用した人材育成と研究開発関係の事業を開始したところ。これは、1年半前にはなかった新しい動きであり、そこも加味しながら改訂していきたい考え。

(3) 意見交換

○中村座長

今回はまだ、道の考え方や具体的なイメージが見える資料がないので難しいと思うが、道として何をしたいのかというと、資料2の4ページの「ビジョン改訂の方向性」と6ページの「基本的考え方」にあるとおり、国の政策や情勢の変化を踏まえて、エネルギー政策とAIや半導体・デジタル関連の産業政策を一体的に展開し、その結果、地域課題の解決を促進し、全道に効果を波及させること。現行ビジョンの策定時にも全道への効果の波及とは何か、議論になったところだが、今回は考え方を整理してAI政策を盛り込み、そして、今までの人材育成の取組や情勢変化を入れること。特に、地域への効果の波及を主眼に議論したいということ。

ただ、今議論になったように、実現性があるのか、そもそもニーズがあるのかということが大きな論点になる。もう少し資料がないと議論は難しく、次回、骨子という形で資料が出てくると思うが、それを待っているとその後が間に合わなくなるので、次回議論をする際に、道にどのような形の資料整理をしてもらえれば良いか、あるいは、こういうところを考えて整理してくれれば議論ができる、こういう方向性で整理したらどう

かなど、道にヒントを与える形で自由にご意見をいただきたい。

○北海道大学大学院 石井教授

資料2の5ページについて、先ほど中村社長からもご指摘があったとおり、地域課題は大変大事。私は道経済部のGXでもお手伝いさせていただいて、委員長として地域に赴いているが、「脱炭素についてどのようなことやったら良いか」と地域で伺っても意見は出ない。「では、脱炭素を一回忘れて何でも良いので地域で困っていること言ってください」と尋ねると、ぽろぽろと意見が出てくる。おそらく、同様にAIに関してニーズはないか尋ねても、何も出てこない。地域課題は本当に素朴で、AIなど使えるとは思っていない人が地域課題をぼろっと言ったことが実は面白いということがよくあるので、そういった地域課題を聞ける体制が大事だと思う。

道庁の中には、そういう会議体がたくさんあって、ある時はスマート農業、またある時は脱炭素、今度はAIで地域に入るが、会議に出る地域の方は大体皆さん同じ人。この間はAIで来たけれども、今日は脱炭素でまた来る、会議とワークショップの嵐になる訳で、私はワークショップの公害だと思っている。私が言いたいのは、エネルギーやAIは手段であるので、地域課題ということで、道で所管している人たちがまとめて地域に聞きに行くのと良いと思っている。AIやエネルギー、農業の専門家など、道の色々なソースがあると思うが、マッチングというのは、縦割りで企画してやるのではなくて、少なくとも二つ、あるいは、三つの団体やグループが合わせて地域の課題を聞きに行くのと、地域の課題を言う人もなんとなく言いやすい環境になるかもしれないし、解決する方も、例えばAIとエネルギーの人がこれは良いとすぐに言えるようになるかもしれない。先ほど話があった、色々な人たちが乗り合えるようなプラットフォームといったものをつくっていただけると良いと思う。

AIは非常に幅広いので、血流のようにあちこちに広がっていく可能性があると思う。ただ、それをAI、AIと言い過ぎると駄目だと思うので、AIがさりげなく使われ地域課題が解決されるような社会にすることが大事であると思う。

○株式会社調和技研 中村代表取締役社長

石井教授のお話は大変共感できる。最初に、AIで何かやろうとネタを集めにいくと地域からは絶対に出でなくて、言うのもはばかりされるといった雰囲気になってしまう。

「何でも良いので困っていることはないですか」と言った時に、「それはAIの世界で割とできる」と言うことができるものもある。できないものもあって、「私たちの分野ではないし、費用対効果がかかり過ぎる」といったところから会話をするものもあると思う。AIはあくまでも道具で、それをどう使うかというものもあるし、魔法ではないので、データが必要という話になってくると思う。

今、実際のAIのデータを使って、「AIのモデルをつくったことはないが、やって

みたい」という人に、教材として面白い課題を提供して仮想のチームで解決する、道内と道外の方が入ったAIの道場のようなものをつくっている。地域の課題を皆で解決できたという話になれば、先ほどの人材育成の話にもつながっていく。さらに面白いのは、そこでできたものがAIの実証実験として成功したら、次は本当の開発に入るはずなので、地域にお金ができるようなスキームを、金融機関に融資していただくなどしながら、地域を活性化していくことはできるのではないかと考えている。

今年で5年目になる雪の問題だが、今年ぐらいからは、本当にできるのであれば、面白いのでやってみようという話になっているが、誰にも迷惑をかけていないもの。地域の課題を解決したい人から課題を出していただくが、それは課題ではなく、もう少し高尚に言うと、実は勉強の材料になってきている。そこを学びたい人たち、先ほど言及した名寄など、そういうことを学びたい、やってみたい地域の人たちもいないわけではないので、上手にマッチングをして、皆で地域の企業、産学が一緒になってやっていくという、草の根的な動きがあっても良いのではないかと考えている。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

このビジョンができた暁には、誰が主に読んで、誰を縛って、どのように使われていくものと理解すれば良いか、そこを改めて確認、共有させていただきたい。

また、次回、道が作成する戦略にも及ぶ資料を基に議論するという事かもしれないが、石井教授や中村社長の話は、既に資料2の6ページにある「基本的考え方」を踏まえて、どうやっていこうかという内容を含んでいるように思い、そういう意味では、今日この場でAIや半導体のプロフェッショナルの方からご意見をさらにお聞きできるとありがたい。

○事務局（浦田室長）

ビジョン策定の際の趣旨にもまとめているが、基本的には、道がまとめたものとして、道民の皆様にも共有させていただきたいということで策定している。誰を縛るかということについては、一義的には、道の施策として進めていくに当たり、これに沿って進めるということがまずあると思うが、市町村の皆様や民間、教育・研究機関、関係機関の方々にも、旗振り役の道から、これを基にお願いや協力を求めていくことがあると思う。そういった意味で、活用ということにも関わってくると思うが、ビジョンの中で具体的な財源や施策までは明記できないが、毎年度、施策を打ち出していく際の一つの基本的な方向性ということで活用していくことになる。

○北海道ニュートピアデータセンター研究会 前田運営委員

先ほどからビジョンの話聞いていて、産業と経済が混同されているように思う。産業界としては、脱炭素はエネルギー産業での新しい手段。AIデータセンターとあるが、

データセンターは一つの産業セクターと見ても良い。半導体もパワー半導体からアナログ、2ナノのような微細なものもあるが、半導体という産業。資料2の5ページの右側でいきなり社会実装の話が出てきて、社会実装の一つの手段としてAIが示されているが、その間、真ん中がすっぽり抜けているのではないかと思う。産業が集積してきたら経済につながるので、社会全体で経済をよくしていこうというのは大賛成だが、ここが一足飛びになってしまっている。

先ほどもお話があったが、データセンター、AIデータセンターが増えたら、AIのフィールドが増えるかということ、恐らくイコールにはならない。半導体産業が増えたらIT企業が札幌に増えるかということ増えないと思う。恐らくここが一足飛びになってしまっていることが一つ課題かなと思っていて、この間を埋めるものを道が旗振りをしてつなぎ込んでいくと、道全体が良くなっていくのではないかと思った。

○事務局（眞鍋参事）

今、頂戴した意見も踏まえて検討したい。今回、有識者の皆様からご意見をいただいているが、次回以降、資料2の5ページをベースに、半導体・デジタル関連産業、ラピダス社を契機に、どのようにしたら産業が集積して北海道が少しでも良くなっていくのか。地域課題の解決には色々な道筋があると思うが、その道筋の一つの考え方をお示ししたい。資料2の5ページの絵については、前田運営委員からのご指摘も踏まえ、検討していきたい。

○北海道立総合研究機構 小高理事長

今のご意見の関連で、「間を埋める」のは理屈ということで良いか。

○北海道ニュートピアデータセンター研究会 前田運営委員

理屈もそうだが、産業セクターをどうつなぐかというところをもう少し書き出す必要があって、例えば、エネルギーが生まれてデータセンターに行くというような形で、産業がつながることは、他の産業でもあることではないかと思う。そのようにして生まれたものについて、より経済的な目線でサプライチェーンを書かなければいけない。その中で足りない存在がAIや人材育成ではないかというふうに、横から肉付けしていくと社会が良くなると思うので、資料2の5ページの右側に、青い枠囲みは来ないのではないかと思っている。より良い北海道があって、上下に肉付けする、足りない素材を埋めていくべきではないか。先ほどAI道場の話もあったが、恐らくそういう積み重ねが北海道を良くするという言い方が、アウトプットとして正しいと思う。

○株式会社調和技研 中村代表取締役社長

私は実務なので、どのように結びつけるかが必要だと考えているので、先ほどのAI

道場がそうだと思っている。前田運営委員のところでは、データセンターを造ったからといって、必ずしもそこを使う人がいる訳ではないということと似た問題になってくると思う。

○北海道ニュートピアデータセンター研究会 前田運営委員

データセンターを増やすとラピダス社の半導体を使うのかと聞かれても、その間にはサプライチェーンがあって、産業界ごとに違うのでそうはならないが、経済界からはそれを期待される。そこをよりマクロに見れば確かにそうなるという絵面にすると、一事業者がそういったことを考えなくて良いはずという世界観をつくれないうか。夢物語かもしれないが、そういうことができれば良いと思っている。

○株式会社調和技研 中村代表取締役社長

データセンターができると、弊社に「データセンターを使わないか」と必ず話があるが、使うのはお客様。お客様がどう使うかを結びつけるためにどうしたら良いのかを考えると、弊社の実務的な話が生きてくると思う。

○中村座長

非常に難易度は高いと思うが、実務的なストーリーと世界観は良いことだと思うので、道庁に整理いただきたい。

○北海道大学大学院 太田教授

外から見た道の施策の特徴だが、北海道は広く、公平に各地域で同じ政策を行ってもあまり意味がない。特に、デジタルやAIの話になると、ラピダス社の立地が地方にどのような波及効果をもたらすのか問われると、効果がないというのは言い過ぎかもしれないが、効果は少ない。それが道から出てくるビジョンの迫力の無さだと思う。尖ったビジョンを出さないと日本中では読まれないし、共感されないと思うので、限界は分かるが、そこにチャレンジしたいという気持ちがある。石狩はこうで、オホーツクはこうという、明確でなくても色を出して良いのではないかと思う。処方箋までは作れないと思うが、違う課題があると思うので、その辺が目立つような、びっくりするようなビジョンがあると北海道らしいと思う。

北海道は、フロンティアと進取の気性の文化があると言われているが、実はその逆で、保守的だと思う。ラピダス社がせっかく来たのだから、変わるチャンスだと思うので、恐らく次のビジョンが期待されるし、中央が読んでいるので、「北海道は何か尖ったことを言うな」という感じでやっただけことを期待している。

○ミツミ電機株式会社 久米事業執行役半導体部門副部門長

現行ビジョンには、例えば、ラピダス社の進出を契機に関連企業を北海道に引き込み、北海道を豊かにするという分かりやすいストーリーがあったと思う。

今回の改訂では、地域の課題を解決するために取り組むというのが主眼かと思うが、道内の産学官だけでできるのか、あるいは、外部、国内外を含めて何か求めるところもあるのか。何かイメージがあれば、ビジョンに書き込む内容ではないのかもしれないが、手段として必要になってくるのではないかと思うので、お聞きする。

○事務局（浦田室長）

外からの力、影響は取り込んでいきたいと考えており、先進的なテーマは道内だけでは先に進まないところもあるので、道外や国外も含めて議論の観点に入れていければと思う。

○北海道大学大学院 太田教授

視野に入れておくべき産業として、データセンターや半導体、発電等といった業種があるが、特に札幌の強みとしてコンテンツ産業があると思う。デジタルとコンテンツ、アニメやソフトウェアは非常に相性が良く、切っても切り離せない関係にあり、産業振興と言ったときに、デジタル産業であれば、距離的に遠くても良いという特徴がある。この点も視野に入れて知恵を絞れたら良いと思う。

○北海道ニュートピアデータセンター研究会 前田運営委員

北海道は全国で魅力度ナンバーワンと言われるほど多くの人憧れる地域で、産業が振興したらもっと住みやすくなる。現状も住みたい人がたくさんいるので、産業や手段の話の前に、「住みたい北海道でこんなことができたら良い」といった話をした方が、夢がある。北海道の魅力が、最大のOS、基幹システムだと思っているので、それを記載いただけるとうれしいと思う。

○中村座長

良い仕事さえあれば北海道に来たい、良い産業やチャンスがあれば住みたいという人は非常に多いと思う。それをビジョンに書き込むのは難しいかもしれないが、堅い、誰も読まないビジョンではなく、挑発的で、明るいものを方向性として出すと良いと思う。

○北海道大学大学院 太田教授

道から出てくる文書やビジョンは道内向けのメッセージが多いが、当然、道や道民が意識している以上に外からも見られているのであって、ビジョンが語りかける相手として、外を意識すると違う色合いになってくると思う。AIとデジタルは、今までの道内向けのメッセージとは違うものを出すチャンスであるので、その点を期待したい。

○中村座長

他に、意見等があればお願いします。

(「なし」と発言する者あり)

厳しいご意見もあったが、北海道愛がこもったご意見をいただいた。今後、これらを踏まえて、道で調整いただくことになる。本日の第1回の意見交換はここまでとし、進行を事務局にお返しする。

(4) 閉 会

○事務局(眞鍋参事)

以上をもって、第1回有識者懇話会を終了させていただきます。

以 上